「神の愛惜」

ヨナ書第１～４章

武蔵野幕屋　日曜聖書講筵　１９７３年１２月１６日

小池辰雄

# 【見出し】

●ニネベの審判の預言　　●ヨナの祈り　　●瓢の徴　●主我一如

【ヨナ１】

　1 エホバのアミタイの子ヨナに臨めりいわく 2ちてかのなるニネベに往き これを呼ばわり責めよ そは其悪わが前に上りればなりと 3るにヨナはエホバのをさけてタルシシへれんと起ちて ヨツパに下り行けるが しもタルシシへ往く舟に遇いければ そのをえエホバの面をさけてにタルシシへ行かんとてその舟に乗れり

　4時にエホバ大風を海の上に起こしたまいて 烈しき海にありければ 舟はんど破れんとせり 5かかりしかば 恐れて おのれの神を呼び 又舟を軽くせんとて その中なるを海に投げすてたり るにヨナは舟の奧に下りいてしてせり 6来りて彼に云いけるは 汝なんぞかくするや 起きて汝の神を呼べ あるいは彼われらをてざらしめんと 7かくて互に云いけるは 此災のにのぞめるは誰の故なるかを知らんがため をかんと やがて籤をひきしに 籤ヨナに当たりければ 8みな彼に云いけるは このなにゆえに我らにのぞめるか 請う告げよ 汝のは何なるや より来れるや 汝の国は何処ぞや 何処の民なるや 9ヨナ彼等にいいけるは 我はヘブル人にして海ととを造りたまいし天の神エホバを畏るる者なり 10 是に於てだしくれて彼に云いけるは 汝なんぞ其事をなせしやと その人々は彼がエホバのをさけて逃れしなるを知れり 其はさきにヨナ彼等に告げたればなり

　11 遂に彼にいいけるは のために海を静かにせんには 汝にがなすべきや 其は海いよいよ甚だしくたればなり 12 ヨナ彼等に曰いけるは われを取りて海に投げいれよ さらば海は汝等の為に静かにならん そはこの大なるの汝等にのぞめるは わが故なるを知ればなり 13 されどは陸にぎもどさんとつとめたりしが にあたわざりき 其は海かれらにむかいていよいよ烈しくれたればなり 14 ここにおいて彼等エホバに呼ばわりて曰いけるは エホバよこいねがわくは 此人の命の為に我儕をしたもう勿れ 又罪なきの血をわれらにし給うなかれ そはエホバよ 汝にかなうところをし給えるなればなりと 15 すなわちヨナを取りて海に投げ入れたり しかして海のあるることやみぬ 16 かかりしかばその人々おおいにエホバを畏れ エホバにを献げ誓願を立てたり

　17 さてエホバすでに大なるを備えおきてヨナを呑ましめたまえり ヨナは三日三夜の腹の中にありき

【ヨナ２】

　1 ヨナ の腹の中よりその神エホバにて 2曰いけるは われの中よりエホバを呼びしに 彼われこたえたまえり われの腹の中より呼ばわりしに 汝わが声を聴きたまえり 3汝我をのうち海のに投げいれたまいて 海の水我をり 汝のとすべて我上にながる 4われ曰いけるは 我なんじの目の前より逐われたれども 汝のを望まん 5水われをりて魂にも及ばんとし 淵我をとりかこみ わがにえり 6われ山のにまで下れり 地のいつもうしろにありき しかるに我神エホバよ 汝はわが命を深き穴より救いあげたまえり 7わがに弱りしとき我エホバをおもえり しかしてわが祈りなんじに至り なんじのにおよべり 8いつわりなるしき者につかうるものはのたる者を棄つ 9されど我は感謝の声をもて汝にをなし 又わが誓願をなんじにさん はエホバよりるなりと 10 エホバ其魚に命じたまいければヨナを陸に吐き出せり

【ヨナ３】

　1 エホバの言 ふたたびヨナに臨めり曰く 2ちてかの大なるニネベに往き わが汝に命ずるところをべよ 3ヨナすなわちエホバの言にいて起ちてニネベに往けり ニネベは甚だ大なるにして これをめぐるに三日をるなり 4ヨナその邑に入りはじめ一日路を行きつつ呼ばわり曰いけるは 四十日をばニネベはさるべし

　5かかりしかば ニネベの人々神を信じ 断食をれ なる者より小さき者に至るまでみな麻布をたり 6このニネベの王に聞こえければ 彼位より起ちを脱ぎ麻布を身にうて灰の中に坐せり 7また王大臣とともにをくだしてニネベ中にれしめて曰く 人もも牛も羊もともに何をも味わうべからず 又物をくらい水を飲むべからず 8人も畜も麻布をまとい 神に呼ばわり 且おのおの其きおよび其手にすを離るべし 9或は神そのをかえて悔い 其しきをめてわれらをさざらん 誰かその然らざるを知らんや 10 神かれらのすところをかんがみ 其あしきを離るるを見そなわし 彼等になさんと言いし所のを悔いて 之をなしたまわざりき

【ヨナ４】

　1 ヨナこの事を甚だしとして烈く怒り 2エホバに祈りて曰いけるは エホバよ 我なおにありし時 あらんと曰いしに非ずや さればこそにタルシシへ逃れたるなれ 其は我なんじはある神 あり 怒ること遅く 慈悲深くしてを悔いたもうものなりと知ればなり 3エホバよ願くは今わが命を取りたまえ 其は生くることよりも死ぬるかた我に善ければなり 4エホバ曰いたまいけるは 汝の怒る事いかでしからんや 5ヨナは邑より出てその東の方に居り己が為に其処に一の小屋をしつらい そのの下に坐しての如何に成り行くかを見る

　6エホバ神を備え これをしててヨナの上をわしめたり こはヨナのの為にをもうけてそのを慰めんが為なりき ヨナはこの瓢の木によりて甚だ喜べり 7されど神あくる日の夜明に虫をそなえて 其ひさごをませたまいければ 瓢は枯れたり 8かくて日のし時 神暑き東風を備え給い 又日ヨナの首を照しければ 彼よわりて心の中に死ぬることを願いて言う 生くることよりも死ぬるかた我に善し 9神またヨナに曰いたまいけるは 瓢の為に汝のいかる事いかでしからんや 彼曰いけるは われ怒りて死ぬるともよろし 10 エホバ曰いたまいけるは 汝は労をくわえずざる此の一夜に生じて一夜に亡びし瓢をめり 11 まして十二万余の右左をえざる者とのとあるこの大なるニネベをわれまざらんや

# ●ニネベの審判の預言

今日で１２小預言書は全部終わるわけです。ヨナ書というのは、私はヘブライ語で創世記の始めの方の次に勉強した所で、ヨナ書は全部読んだ。そういう非常に思い出の書です。

「ヨナ」というのは「鳩」という意味です。しかし、ヨナはおよそ鳩と違うような人間ですが、どうして「鳩」なんて言われたのか分からない。ヨナという預言者は列王紀略下１４章２５節以下にちょっと出ています。２３節から読むと、

「23 ユダの王ヨアシの子アマジヤの十五年にイスラエルの王ヨアシの子ヤラベアム、サマリヤにおいて王となり四十一年位にありき

「ヤラベアム」というのは、なかなか北の王国では素晴らしい王様です。

 24彼はエホバの目の前に悪をなし のイスラエルに罪を犯さしめたるネバテの子ヤラベアムの罪に離れざりき 25彼ハマテのよりアラバの海までイスラエルのをせり

強力な王様ですね。

イスラエルの神エホバがガテヘペルのアミツタイの子なるその僕預言者ヨナによりて言いたまいし言のごとし

そういうことが書いてある。

 26エホバ、イスラエルのを見たもうに 其は甚だ苦しかり 即ちれたる者もあらず 繋れざる者もあらず 又イスラエルを助くる者もあらず 27エホバは我イスラエルの名を天下にんとすと言いたまいしこと無し 反ってヨアシの子ヤラベアムの手をもてこれをいたまえり」（列王下14･ 23～27）

けれども、

「このヨナ書の作者はこのヨナとはおよそ違う人である。ただ昔のこの預言者ヨナの名前を借りてきた」

というのが通説です。ニネベの陥落のことが書いてありますが、

1 エホバのアミタイの子ヨナに臨めりいわく 2ちてかのなるニネベに往き これを呼ばわり責めよ そは其悪わが前に上り来ればなりと

アッシリヤのニネベが陥落したのが、紀元前６１２年ですから、このヨナ書の内容から判断して、大体それからかなり隔たって、古くみても紀元前５世紀から３世紀くらいの間に書かれたものではないかというようなことで、これはしょうがないです、学問上もなかなか断定がつかないらしい。外典の「ベンシラ」とか、「トビアス」の書にこのヨナのことが、伝説的なことが出ています。だから、それより後ということは言えるわけです。

なんだか少し、このヨナというのは、首尾一貫しているとはちょっと思えない。だから、「二資料説」というのがありまして、

「資料が二つあったのがゴチャゴチャになったのではないか」

と。しかし、ある人は

「これは貫いている」

と言う。いろんなことを言う。旧約の学問というのは本当にそうなんです。

「呼ばわり告げた」というが、預言者のあとの方から。それは何か原形があって。物語、大体これを物語とみるのが普通なんです。レゲンデ〔Legende伝説〕、宗教的な物語、あるいは黙示文学的な要素、あるいはそこに純粋に預言的なもの、あるいは叙情的な詩。第２章の祈りなんていうのは、詩篇とかなり通ずるところの内容を持っている。

とにかく──これはアッシリヤの首都ニネベがチグリス河の東側にある──

「それに対する神の審判を預言せよ」

という命令なんです。

3然るにヨナはエホバのをさけてタルシシへれんとちて ヨツパに下り行けるが しもタルシシへ往く舟に遇いければ そのをえエホバの面をさけてにタルシシへ行かんとてその舟に乗れり

「タルシシ」というのは、今のスペインのジブラルタル海峡のそばだそうですが、イザヤ書２３章１節に出ている。要するに、これはフェニキアの商業貿易上の船でしょうね。

「預言は困る」

と言って逃げてしまった。神さまの審判の預言を避けて行くというわけです。しかし、審判の預言ならば、ユダヤ人は大いに受けて立ちそうなものだけれども、ここでは「避けた」ということに一応なっている。

4時にエホバ大風を海の上に起こしたまいて 烈しき海にありければ 舟はんど破れんとせり

難破寸前というわけで、船人たちが恐れて、船が引っくり返ってはいかんというわけで、余計な荷物は下ろしてしまう。……（バルチック艦隊の話省略）……

軽くしようと思って、積み荷を海の中に投げ棄てた。ここらはだいぶ本当らしいですね。

5かかりしかば 恐れて 各おのれの神を呼び 又舟を軽くせんとて その中なるを海に投げすてたり るにヨナは舟の奧に下りいてしてせり

これは別に信仰があってキリストのように寝ていたわけではないので、隠れて非常に無責任に寝ていたわけです。

6来りて彼に云いけるは 汝なんぞかくするや 起きて汝の神を呼べ

みんなが自分たちの神さまを呼んで、「引っくり返らないように」とやっているのに、お前はケシカランと。

あるいは彼われらをてざらしめんと 7かくて互に云いけるは 此災のにのぞめるは誰の故なるかを知らんがため をかんと

「」というと、箴言の１６章３３節に――箴言というのは時々読むと面白い――３２節から、

「32 を遅くする者はにり おのれの心を治むる者は城を攻め取る者にる

これは有名な言葉です。これはもう東西にある言葉です。

「心に打ちかつことは最大の勝利である」

という。これはなかなか勝てない。それが人間の罪なわけです。

 33人はをひく されど事をさだむるは全くエホバにあり」（箴言16･32～33）

３３節のようにヨナ書の場合も神さまによって定められているので、ヨナがいくら逃げたってダメなんだ。籤を引いたら、ちゃんと神の定めのごとくにヨナに当たってしまった。

やがてをひきしに 籤ヨナに当たりければ 8みな彼に云いけるは このなにゆえに我らにのぞめるか 請う告げよ 汝の業は何なるや より来れるや 汝の国は何処ぞや 何処の民なるや

と、畳みかけて問われているわけです。乗組員は、パッセンジャーはその当時の国際的にいろんなのがいたわけです。

9ヨナ彼等にいいけるは 我はヘブル人にして海ととを造りたまいし天の神エホバを畏るる者なり

これはハッキリと正統信仰を告白したわけです。

10 是に於てだしくれて

というのは、「そんなエライ神さまか」と。

彼に云いけるは 汝なんぞ其事をなせしやと その人々は彼がエホバのをさけて逃れしなるを知れり

まぁ、「わかった」という意味でしょうね、始めから知っていれば、聞くわけはないので。

其はさきにヨナ彼等に告げたればなり

とあるけれども、告げたなのならば、「なぜ」ということはないので、ここらの記事がちょっと書き方が矛盾しているように見える。

# ●三日三夜魚の腹の中

11 遂に彼にいいけるは のために海を静かにせんには 汝にがなすべきや 其は海いよいよ甚だしくたればなり 12 ヨナ彼等に曰いけるは われを取りて海に投げいれよ さらば海は汝等の為に静かにならん そはこの大なるの汝等にのぞめるは わが故なるを知ればなり

これはもうハッキリ今度は、ヨナは自覚したわけです。

「自分が悪かった。神さまは、自分の逃げたのを追求しておられる。自分が身を捨てれば静まる」

と、これは今度は非常に責任を身をもってとったわけです。が海の荒れた相模灘を渡る時に、が犠牲になって、それで静かになったという話がありますね。

13 されどは陸にぎもどさんとつとめたりしが にあたわざりき 其は海かれらにむかいていよいよ烈しくれたればなり 14 ここにおいて彼等エホバに呼ばわりて曰いけるは エホバよこいねがわくは 此人の命の為に我儕をしたもう勿れ 又罪なきの血をわれらにし給うなかれ そはエホバよ 汝にかなうところをし給えるなればなりと

自分たちの本来信じている神さまではないけれども、ヨナの信じている神さまの意向を恐れて、急にそういうようにヤーヴェーの神に向かって祈った。その祈りはもっともな祈りです。そこで、

15 すなわちヨナを取りて海に投げ入れたり

自分が「投げろ」と言ったのだから、ヨナもおとなしく投げられた。そしたら、止んだと。ここらは非常に劇的なところです。

しかして海のあるることやみぬ 16 かかりしかばその人々おおいにエホバを畏れ エホバにを献げ誓願を立てたり

　17 さてエホバすでに大なる魚を備えおきてヨナを呑ましめたまえり ヨナは三日三夜の腹の中にありき

クジラがいたらしい。フカではないでしょう、フカでは食われてしまうから。

「三日三夜魚の腹の中にありき」

というが、果して「三日三晩」いられたかということはほとんど考えられないので、

「これは物語だ」

という。しかし、飲まれて、一時間や二時間いて、それから吐き出されるということはあり得るので、そこらが「三日三晩」になってしまったのではないかと、私はそれくらいに思っている。

この「三」という字がよく出てくる。それから「四十」だとか、よく聖書には出てくる。そういうところは決して単なる「三」でもなければ、「四十日」でも「四十年」でもない。キリストのあの断食も「四十日」といいますけれども、何日だか本当のところは分からない。けれども、非常に永いことは事実です。

# ●ヨナの祈り

第２章。

1 ヨナ魚の腹の中よりその神エホバにて

これはちょっと祈りがおかしいんです。

2曰いけるは われの中よりエホバを呼びしに彼われこたえたまえり

ここに「彼」と言っているでしょ。これは後から顧みて、

「祈りて言いけるは──祈りを今から思うと──私は悩みの中でエホバに呼んでいるのに、彼は私に答えて云々」

というのなら分かるけれども、

われの腹の中より呼ばわりしに 汝わが声を聴きたまえり

と、今度は「汝」という。だから、その祈りの内容を間接に思い出しているのか、あるいは直接に言っているのか、ゴチャゴチャにそこのところが混ざっている。そしてしかも、

「この祈りは後から付け加えた祈りである」

と、ほとんど通説になって学者がみなそう言っている。

「それをヨナの祈りのごとくにしてしまったものだから、そこのところが二人称になったり、三人称になったりしている」

というようなことです。むしろ、「ヨナは吐き出されてから本当に祈った」ということなら分かると思う、そういうように書いてあるなら。即ち、

「自分は本当に悪かった」

というヨナの棄身の態勢を、神さまは特別に魚を通して救われた。それはもちろんあり得ることだし、それが事実だったと思いますけれども。むしろ、

「浜辺でもって、平伏して祈りました」

と書いた方が本当だと思う。

3汝我をのうち海のに投げいれたまいて 海の水我をり 汝のとすべて我上にながる

というのは、後から思い出して言ったような言葉ですよね。

4われ曰いけるは 我なんじの目の前より逐われたれども 汝のを望まん 5水われをりて魂にも及ばんとし 我をとりかこみ わがにえり 6われ山のにまで下れり 地のいつもうしろにありき しかるに神エホバよ 汝はわが命を深き穴より救いあげたまえり 7わがに弱りしとき我エホバをおもえり しかしてわが祈りなんじに至り なんじのにおよべり

非常に「神殿」のことを言っている。神殿宗教です。だから、捕囚期後の宗教ということがこういうふうな言葉でもわかる。

8いつわりなるしき者につかうるものはのたる者を棄つ

この７節、８節あたりはみな、詩篇に出ている言葉と照合できる。

9されど我は感謝の声をもて汝にをなし 又わが誓願をなんじにさん はエホバよりるなりと

こういったような祈りは、むしろその災難を思い出して、そして祈った。

「こんなような具合に祈りました」

というならわかるんですけれども、どうもちょっとおかしい。とにかく、ヨナの祈りがあったということは言えるでしょうけれども、腹の中でこれだけ祈ったかと、そういうことはちょっと腑に落ちない。

10 エホバ其魚に命じたまいければヨナを陸に吐き出せり

そういうように書いてあるでしょ。これがいかにもその筆があるひとつの「ディヒテン」（Dichten 詩作、創作）、作であるかということがわかる。

# ●ニネベの悔改め

第３章。

1 エホバの言 ふたたびヨナに臨めり曰く 2ちてかの大なるニネベに往き わが汝に命ずるところをべよ 3ヨナすなわちエホバの言にいて起ちてニネベに往けり ニネベは甚だ大なるにして これをめぐるに三日をるなり

ここにも「三日」とあるでしょ。けれども、実際は大体その周囲が２０マイル位だそうで、「三日はかからないだろう」という。まぁ三日かかるかもしれませんが。

4ヨナその邑に入りはじめ一日路を行きつつ呼ばわり曰いけるは 四十日をばニネベはさるべし

これが七十人訳ギリシア語聖書だと、「三日」と書いてある。そこらが非常に食い違っているわけです。要するに今度は、神さまの預言をそのまま受けとって、「滅び」を預言した。これは第１章と辻褄が合うわけです。

5かかりしかば ニネベの人々神を信じ 断食をれ 大なる者より小さき者に至るまでみな麻布をたり

ここはえらく素直にニネベの人は――なにもヤーヴェーの神を信じているわけではないけれども――悔改めたという。ここらが物語だというわけなんです、事実そんなことはあるはずがないというわけでね。

6このニネベの王に聞こえければ 彼位より起ちを脱ぎ麻布を身にうて灰の中に坐せり

この「麻布を身に纒うて灰の中に坐する」というのはみな悔改めの姿です。ヨブ記にもヨエル書にもあった。

7また王大臣とともにをくだしてニネベ中にれしめて曰く 人もも牛も羊もともに何をも味わうべからず

まぁ大変なことです。

又物をくらい水を飲むべからず 8人も畜も麻布をまとい 神に呼ばわり 且おのおの其きおよび其手にすを離るべし

これは断食の典型的なひとつの境地を描いてしまったわけです。

9或は神そのをかえて悔い 其しきをめてわれらをさざらん 誰かその然らざるを知らんや

とにかく、典型的な悔改めの態勢にきたわけです。

10 神かれらのすところをかんがみ 其あしきを離るるを見そなわし 彼等になさんと言いし所のを悔いて 之をなしたまわざりき

一応、審判をなさらなかった。これは、

「悔改めれば、審判をすることは、神さまはやめて悔いる」

というような言葉はエレミヤ記の中にも出てくるような言葉です。

# ●瓢の徴

第４章。

1 ヨナこの事を甚だしとしてく怒り

ときたでしょ、今度は。即ち、せっかく、神さまの審判の預言をしたのに、審判をやめてしまった。

「神さまはケシカラン」

というわけで、ヨナは

「甚だしとして烈く怒り」

と。この悔改めの事態を全然ヨナは見ないわけです。ところが、

「自分はエホバを避けて、悪かった」

といって悔改めて祈ったらば、とにかく救われてしまったでしょ。そういう自分の体験はそっちのけで、今度はそのニネベが悔改めたのに「良かった」と言わないで、

烈く怒り 2エホバに祈りて曰いけるは エホバよ 我なおにありし時 あらんと曰いしに非ずや さればこそにタルシシへ逃れたるなれ

そこのところが、なぜこういう言葉を発したのか、それがちょっと分からない。

其は我なんじはある神 あり 怒ること遅く 慈悲深くして災禍を悔いたもうものなりと知ればなり

とあるでしょ。それならなぜ怒るんですか。そこのところがわからない。どうも辻褄が合わないので、私はそこのところがどうにもならん。非常に矛盾的だ。矛盾というのは、その矛盾構造を持ちながら、ひとつの大きな調和にくるのならいいけれども、その矛盾がどうにもならない矛盾だと困る。誰か分かるなら教えて下さい。

3エホバよ願くは今わが命を取りたまえ

今度はヤケクソになってしまって（笑）、そういう憐れみのある神さまに対しては何も、

「命を取りたまえ」

なんて言わなくたっていい。

其は生くることよりも死ぬるかた我に善ければなり

と。

「審判を預言しろと仰るので、いよいよ立ち直って預言しましたが、あなたはまた赦した。なぜ赦したか」

と。この悔改めの面をそっちのけにして、それから、

「神さまは憐れみがある、怒るのが遅い」

ということを知りながら、しかも捨て鉢になってしまって怒って、

「いや、私はもう生きていたくない、死にたい」

なんて。

これとはちょっと違うんですけれども、預言者エリヤが、列王紀略上の１９章のところで、バアルの預言者たちと一騎討ちをして、彼は彼らに勝った。ところが今度は、イゼベルに追われて、荒野に逃げて行く。エニシダの木の下でもって――これはやはり非常に暑かった――眠った。その時に、

「もう私はたくさんだ、死にたい」

と言ったという、同じような言葉がある。１９章１節から、

「1アハブ、イゼベルにエリヤの凡てしたる事 及び其如何にの預言者をにて殺したるかを告げしかば 2 イゼベルをエリヤにわして言いけるは 神等なし 重ねて斯なしたまえ 我必ず明日の今時分 汝の命を人々の一人の生命のごとくせんと 3 かれ恐れてち 其生命のために逃げ往きてユダに属するベエルシバに至り を其処にして 4 自ら一日ほどに入り往きての下に坐し 其身の死なんことを求めていう エホバよ足れり 今わが生命を取りたまえ

自分は命を追求されているからと。

我はわがよりもにはあらざるなりと 5 彼の下に伏して寝むりしが天の使 彼にりてえと言いければ 6 彼見しに其頭のに炭に焼きたるパンと一の水ありき ち食い飲みてたり 7 エホバの復再び来りて彼にりていいけるはて食え其は途長くして汝べからざればなりと 8 彼興て食い且飲み其食の力にて四十日四十夜行きて神の山ホレブに至る」（列王紀略上19･1～8 ）

それで、パンがあって力を得て、そしてまたどんどんホレブの山まで行ったということが書いてあります。ちょっとどこか似たようなところがある。

3エホバよ願くは今わが命を取りたまえ 其は生くることよりも死ぬるかた我に善ければなり

「私はこれでは生きている気もしません。あなたのすることはちょっとおかしい」

というわけなんだな。

4エホバ曰いたまいけるは 汝の怒る事いかでしからんや 5ヨナは邑より出てその東の方に居り 己が為に其処に一の小屋をしつらい そのの下に坐しての如何に成り行くかを見る

どうも、これは私は「二資料説」の方が本当ではないかと思っているんですがね、ゴタゴタしているから。

 6エホバ神

「エホバ神」という言い方もちょっとおかしい。片一方では「エホバ」というのに、こっちは「エホバ神」なんて言っているでしょ。創世記のところでも、「エホバ神」という言い方もやはり資料が二つになっている。そいつを辻褄を合わせるために、「エホバ神」なんていう。「エロヒーム」というと、「ヤーヴェー」という字を使ってね。

を備え これをしててヨナの上をわしめたり

というのは、暑いから。

こはヨナのの為にをもうけてそのを慰めんが為なりき ヨナはこのの木によりて甚だ喜べり

これもまた面白いですね、矛盾している。

「死んだ方がいい」

と言うなら、暑さでもって仆れてしまえばいいんだけれども、助かるものだから喜んだ。これは駄々っ子ですよね。

7されど神あくる日の夜明に虫をそなえて 其ひさごをませたまいければ は枯れたり 8かくて日のし時 神暑き東風を備え給い 又日ヨナの首を照しければ 彼よわりて心の中に死ぬることを願いて言う 生くることよりも死ぬるかた我に善し

まぁ勝手なもんです。

9神またヨナに曰いたまいけるは の為に汝のいかる事いかでしからんや 彼曰いけるは われ怒りて死ぬるともよろし

非常にもうヤケクソなんだ。

10 エホバ曰いたまいけるは 汝は労をくわえずざる此の一夜に生じて一夜に亡びしをめり

何もしないくせに、一夜で生じたら歓び、枯れたら怒って惜しんだ。

11 まして十二万余の右左をえざる者とのとあるこの大なるニネベをわれ惜まざらんや

こういうわけなので、どうも、このヨナ書を何回読んでも、すっきりしない。ただ、一般の註解書も言う通り、ユダヤ人は大体、である。その狭隘な気持を突き抜けて、どんな異邦人でもこれを神さまは深く救おうとして愛惜しておられるという。だから、このヨナ書というのは、その意味においては非常に──パウロも異邦伝道に向かって行く──神の万人救済への、万国民を救うという、その消息を教訓的に物語的に表したものだと。まぁそれはそうでしょう。それはその最後の一句がそのことを締めくくっているわけです。

「まして十二万余の右左をえざる者とのとあるこの大なるニネベをわれ惜まざらんや」

という。

「右左をえない」

のだけれども、しかしとにかく、その３章５節から１０節にあるように、悔改めにきた。悔改めにこない者をいきなり赦すわけにいかない。やっぱりここで、ゴタゴタしていても、神学的にはある意味において貫いているものがある。

即ち、ヤーヴェーの神は義の神で審判を持っている。だから、ニネベの審判の預言がきた。その義の神、審判ということに対しては、ユダヤ人はよく分かっているから、何もこのヨナは避けることはなかった。それがなぜ逃げたかわからない。逃げて神さまにもう少し憐れみの気持を起こさせようというのなら分かるけれども、そうではなくて、逃げたのはむしろ神の意志に従わなかった。ヨナはその点では不信行為をしたわけです。それをヨナは今度はその不信を悔い改めた。そして、自分の死をもって──この場合の死は悪くはない。さっきの捨て鉢の死とはおよそ違う──だから、およそ違うですよ、ここらの人間がまるで。これは情をもって悔い改める。ですから、それを神さまは魚によって救った。

それから今度はもう一遍、採用を再び用いられて、再起せしめられて、そしてこの審判に今度は向かっていく。審判の預言ですね。そうすると今度は、ニネベは悔い改める。神さまはこれを赦した。そうすると、ヨナは今度は、

「これはケシカラン」

といって怒る。ヨナの怒りはいかんです、これはまちがい。ここにニネベの悔改めという要素があるからね。なければ、それは赦したら、そんな神さまの赦しはケシカランといって怒るのはわかっているけれども。しかし、神さまの憐れみというものを、神の愛というものを、彼は知っているという。そこのところがまた矛盾している。

神さまは、今度はヨナにの徴でもって、「どういうようにこれをとるか」と。ヨナはやはりこのの徴でもって落第。彼はまた怒ったりしてね。だから、その点で、ヨナのユダヤ的な頑なさというものが、あるひとつの矛盾構造で出ているわけだ。

「それはいかん。万人救済なんだ」

という、ヨナ書の構造ができているとわけでしょうね。ヨナ書をあるがままに見ていくと、どうもそういうことで、腑に落ちない言葉の物語の運びがそこにも見えるわけです。

# ●主我一如

私たちはいつも、この聖書を読んで、それが神さまのことであっても、それを三人称的に考えてはダメです。どこまでも二人称、対称で考える。そして最後は一人称です。この事態は、客観的に見る世界はみな三人称的な世界です、「彼、彼女、それ、彼ら」という。ところが、二人称の「あなた、なんじ」に、「彼は」というところは「汝は」とこなくては。そしてこの「汝」が今度は、「我」に変わらなくては。直説法一人称現在に、そういう角度で受けとっていかないと、聖書の真理は本当に受けとれない。

我々自身も、ヨナのことを笑うけれども、いろいろ矛盾を犯す。

「なんだ、あいつはああ言ったのに、こうした」

とか、いろいろそう言っては、お互いにいろいろなことを言っているわけだ。人間というのはしょうがない。駄々っ子がよくいるから。人ばっかりではない。それで何を言っているのか訳がわからない。非常にいいかと思うと、全然反対なことを言ってみたり。まぁいろんなことで困っている人もいると思いますが。

結局しかし、私たちはしょうがない、お互いさま五十歩百歩の駄々っ子でありますが、それを神さまは愛惜している。「愛惜」という言葉を私が初めて聞いたのは、三谷隆正先生〔1889/2/6～1944/2/17〕の話の中に「愛惜」という言葉が出てきて、

「ああ素晴らしい言葉だな」

と思ったことを覚えています。愛し惜しむという。

神さまは私たち一人びとりを、また自分の友人たちを、あるいはこの集会から出て行ったご連中を〔愛惜している〕。……

どんなデコボコの存在を通しても真理はくる。先生の言葉をただ先生の言葉として受けとるのではなくて、先生の言葉を通して、神の言葉が語られている。そうすると、いろんなものを通して結局、「神と我」ということ。ただ直接ばっかりではないですよ、間接もいくらでもある。そして、「神を愛する」ということは、神をただ直接に愛するのではなくて、

「小さき一人の人を愛するは即ち我を愛したるなり」

という。小さき一人の人を通して神の言葉がくるです、小さな子供を通しても。だから、すべての体験は結局、それを神において――あるいはサタンを通すこともあるよ、サタンを通してすらも――神さまはもうひとつ大きな次元からやることがあるんだから。たとえば、アッシリヤとバビロニヤを通して、イスラエルとユダは滅ぼされた。これは

「アッシリヤとバビロニヤ、この野郎！」

ではない。アッシリヤやバビロニヤという悪いやつを通して、神さまはイスラエルに〔審判をくだす〕。これは神の業なんです。彼らはただ手足になったにすぎない。相対的によいのでも何でもない。むしろ悪いやつだ。

そういうわけで、どのような事態においても、神において体験する。もうひとつ言うと、

「主に在って、キリストに在って」

体験する。私たちは直接に「神に在って」ということは、これはある意味において非常に苦しいことです。主は贖い主だから、執り成しの。主に在って体験する。主に在って体験すれば、すべてのプラスもマイナスも全部、本当のプラスになる。

だから、主に在って、そしてそれを一人称として体験するということは何かというと、「主に在って」の「に在る」ということは「の中に」ということ。「イン」(の中)における体験です。まだ主を体験しているうちはダメですよ――ダメとは言わないけれども――二人称から一人称になるということは、

「主と我とは一つ」

ということ──「主我」という言葉はよくないですよ、主我的という言葉があるから――「主と我」が主我一如の一人称ですよ、主から我を離しての一人称ではない。

「主と我とは一つである」

という、一人称になったときに、これは本当のことになる。だから、神は主に在って、主において私たち一人びとりを愛惜し給う。

「そんな駄々こねるんじゃないよ」

と。そして、

「悪かった」

と言えば、神さまはまたもう一遍、枯れたを伸ばしてくれる。そして今度は、その「主における愛惜」を通して、今度は人を愛惜するわけです。

だから、私は昔のいろんな友人が出たり入ったりして、まぁ

「この野郎！」

なんて思うのもあるさ。けれども、今、私はその一人びとりを、その人の善さにおいて覚えている。みんな他のものは消えていく。それでなければ、私の中に本当の聖霊が働かない。聖霊の世界というのは本当にそういう愛です、救い上げの愛ですから。救い上げの愛のときに、私たちのは本当に炎のように強くなる。

私は正直、そうですよ。どういう人でも決して、どんなに私を悪く言おうが、決して私はその人を恨まない。これはもうキリストの愛がくれば、そういうことになるから。それでなければ、私の存在の価値はない。私自身がえらいのでも何でもない。キリストが凄いんです。私自身はどんな野郎だっていいんだ。キリストがかくなさしめたもう。このキリストの愛惜です。「神の愛惜」は正に主の愛惜として、我々の中ではたらく。

そうすると、このヨナ書は──ヨナの野郎がどんなに矛盾したって大丈夫だよ──今度は本当の意味でヨナ書が読めてくる。むしろ、ヨナの野郎は矛盾した男だからね、かえってヨナ書のそういう、ある意味で支離滅裂的なものを通して、もうひとつ神さまの大きな愛惜が見えてくる。ユダヤ人的な審判、そして「けしからん」なんて言ってヤケクソになって「死のう」なんてね。

「もう死にたい」

なんていうことを言う人があるね。あれはこのヨナ式なんだ（笑）。そんな駄々をこねるのではありませんよと。

そういう意味において、今度はヨナ書の価値というものが別に新しく浮いてくる。それ自体としては、私はさっき言ったとおり、相対的な角度からはどうもあまり感心できない書物なんだけれども、もうひとつ奥からみると、そういうことになる。終わります。